

シンガポールの先進的な教育施策（第2回）

シンガポール事務所

前回に引き続き、シンガポールの学校現場への訪問の概要を報告する。

シンガポールは1965年の建国以来、順調な経済発展を遂げてきた。その成功は、二言語主義の導入や、前回紹介した国家のリーダー育成のための徹底した能力主義による教育制度の運用など、その教育システムに負うところが大きいと言われている。

その後、より優れた教育システムの構築を目指し、1990年代後半から、「Thinking School, Learning Nation」(TSLN)と表現される新たな教育ビジョンが提唱され、一人ひとりの多様な能力の発展を目指すシステムへの変革が開始された。

さらに、2005年には、「Teach Less, Learn More」(TLLM)の理念が発表され、以後、現在に至るまで、試験のためではなく、ライフスキルの習得、すなわち創造力、思考力、応用力、探究心等を含む総合的な能力や、問題解決能力の醸成に力点が置かれるようになっていく。

こうした背景の下、政府が改革に力を入れてきたのが、今回紹介するポリテクニクや、シンガポールの職業教育において大きな役割を果たしている技能教育研修所などである。

1 人材育成における産業界との連携

ポリテクニク (Polytechnic) は、実業界の需要に合った実務レベルの人材を育成することを目的とする教育機関である。工学、化学、生命科学、デザイン、ビジネス、経営、会計、マスコミ、観光、演劇、人文、情報通信等のコースがあり、工業技術や商業などに興味のある生徒に、実習室や作業室での実地体験を中心とする教育を提供する。就学期間は3年で、GCE-O レベル (中等学校卒業時認定試験) に合格した生徒が進学し、現在、シンガポール (Singapore Polytechnic)、ニーアン (Ngee Ann Polytechnic)、テマセク (Temasek Polytechnic)、ナンヤン (Nanyang Polytechnic)、リパブリック (Republic Polytechnic) の5校が設置されている。

ここでの特色は、カリキュラムや学部、単位などの組み立てに、産業界の意向が強く反映されていることである。

ポリテクニクは、シンガポール教育省 (Ministry of Education) 管轄下の法定機関であるものの、設置する学部やコースについて教育省からの指定はなく、各ポリテクニクが独自性を競い合っているとのことである。他方、各校には、関連する産業の企業からの委員による諮問委員会 (Advisory Committee) が設置されており、民間企業のニーズの観点から学校の運営に対する諮問を行い、産業界の実情や要望にフィットした人材育成のため、2~3年おきにコースの評価や、新しい学部の提言などを行っている。

るとのこと。

また、各ポリテクニクには、シンガポール技術学校（SIT：Singapore Institute of Technology）というポリテクニクの卒業生が、より高度な専門教育を受けられる専門機関が設置されており、この設立にあたっては、教育省と共に、人的資源省（MOM：Ministry of Manpower）や経済開発庁（EDB：Economic Development Board）が連携するなど、ここでも人材育成における、教育現場と産業界との連携の強さが窺える。

今回訪問したニース・ポリテクニクは、1963 年に設立され、1 学年約 5,000 人、合計約 15,000 人の学生が広大なキャンパスで学んでいる。現在 8 つのアカデミックスクール（学部）に 49 のディプロマが設置されているが、上記の提言や学生からのフィードバックなどを考慮した新しい学部の開設や国際プログラムへの参加機会の提供、Mobile E-learning など新しい学習設備の先駆的な導入などで学生の支持を得ることに成功し、ニース



キャンパスは日本の大学の雰囲気に近い

ン・ポリテクニクを第一志望とする学生の割合が年々増加するなど、国内トップの人気校になったとのこと。また、これにより、入学を志望する生徒の学力レベルも向上しており、通常であればより成績優秀者が集まるジュニアカレッジに進学できるレベルにある生徒からも、この環境で学ぶことを選んで進学してくる生徒が増えてきているという。



ライブラリーでリラックスする学生

こうした変化は、より幅広い人材を求める産業界にとって好ましい傾向であるのはもとより、ともすれば学力偏重主義として問題視されていた学生の画一的な進学志向に対し、一人ひとりの多様な能力の発展を目指す、政府の教育システムの変革に呼応した変化を見て取ることができる。

2 生きる力を育む技能教育

技能教育研修所（ITE: Institute of Technical Education）は、ポリテクニクと同様に、中等学校の卒業者を対象に幅広い分野での技術訓練と実務訓練を行い、各種の資格を取得できるようにしているほか、一般社会人を対象に、技術向上のプログラムを提供し、技術向上に関する指導や資格試験を行っている。加えて、様々な理由により学校教育を受けることができなかった勤労者を対象に、パートタイムで教育を受ける機会を提供している。

ITEもポリテクニク同様、国の法定機関として設置され、これまでシンガポールの職業教育の要としての役割を果たしてきた。しかしながら、従来、学力こそ最大の価値と考えられてきたシンガポールにおいては、決して脚光を浴びてきたわけではない。

従前のITEは、“It’s The End”（ここに来たら“もう終わり”）と揶揄されるなど、能力主義のシンガポールにおいては非常に厳しい立場に置かれ、厳しい学力競争についていけなかった学生がどうしても無く行く場所という見方をされていた。言わば、若くして負け組のレッテルを張られてしまった生徒には、無気力や無関心といった学力以前の心理的問題が見られることが多く、殆どのITEでは、学生を学校に来させるところから苦勞していたという。

しかしながら、現在、ITEでは、新しいキャンパスの建設や、最新の実習施設の整備などハード面の充実に加えて、実際の消費者に対するサービス提供の実習など、より実践的な教育アプローチの導入や、カリキュラムの再編、イメージアップのプロモーション等に非常に力を入れて取り組んでいる。また、既存の学校をITE College Central、ITE College East、ITE College Westの3つに統合・再編する「One ITE System, Three Collegesモデル」の導入が、2013年を目途に進められるなど、改革が進んでいる。

ITEでは現在、社会人等も含めて全体で約25,000人の学生が学んでおり、今回訪問したITE College Westでは、約40のコースを設置し、人気のコースは、ホスピタリティー（サービス産業）、ビジネスサービス、ITコースなどで、訪問時にも、レストランで働く調理師や、パティシエ、バーのウェイター等の実習に励む生徒の様子が見られた他、映像や音楽、メディア関係のコースに使用されるレコーディングや撮影スタジオなども含め、本格的な機材や環境が導入されており、非常に実践的なトレーニングが提供されている様子が窺えた。

また、産業界からも覚書に基づいて、機材の提供や奨学金、海外研修の機会などが提供されているという。例えば、ホテル業務の実習で使用される業務マニュアルやサービス基準は、フォーシーズンズホテルが実際に使用しているマニュアルを提供しており、客室内の設備や備品の機能等も再現し、実社会に出た際に即戦力として活躍できるよう、順応性を高めるための環境を整備しており、最も特筆すべきは、ITEで学んだ生徒の90%が、卒業後6か月以内に就職しているという。



新しく開放感のある ITE のキャンパス



本格的な施設で実習に励む生徒の様子

この度2回に渡り、視察を通じたシンガポールの教育現場の紹介を行ってきたが、今日のシンガポール政府が行う教育改革は絶え間なく続いており、明日のシンガポールを支える人材の育成に、まさに国を挙げて取り組んでいる。2011年に行われた総選挙において、与党の政策に国民の声が一石を投じるなど、国政の過渡期を迎えつつあるシンガポールにおいて、唯一の国家資源とみなす“人材”の育成に関し、今後どのような舵取りが行われていくか、引き続き注目していきたい。

<参考>

- ・シンガポールの教育施策の全体像及び教育施策の変遷等については、「シンガポールの政策（2011年改訂版）教育政策編：財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所」をご参照ください。
- ・自治体国際化協会シンガポール事務所 HP <http://www.clair.org.sg/j/reports.html>

(学校現場訪問時間き取り等による)

(小宮山所長補佐 東京都派遣)

